

---

# 仮面の軍勢の氷龍使い

凜々の明星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の軍勢の氷龍使い

### 【Nコード】

N0945V

### 【作者名】

凜々の明星

### 【あらすじ】

110年前におきた魂魄消失事件  
それから100数年たった時物語は始まる。

## 初めに

この小説はBLEACHの二次創作です。

オリキャラが多数いたりありえないこと、原作との違いが沢山あると思います。

そのようなことが嫌いな方は見ないことをおすすめします。

作者は素人です。文はおそらくグダグダになると思います。

そのところ注意して読むかどうかきめてください。

なお、作者はBLEACHの話は知っていますが原作はもっていません。この話おかしいなと思うところが絶対にでてくると思いますのでご了承ください。

なお、この小説は不定期更新となります。不定期なので更新するの間に間があく可能性が高いです。

## 一話（前書き）

所々おかしいと思いますがよろしくお願いします。

この小説では原作では本来死んでいる人も生きているかもしれないので、ご了承ください

## 一話

とある場所で一人の青年が目をさました。

「あれから100年以上も時がたったのか。時間が経つのは早いな。」

その青年の姿は銀髪で翠色の瞳をしていた。

「そろそろ下におりるとするか。」

その青年、日番谷冬獅郎は立ち上がり、部屋をでた。部屋を出て階段をおりるといい匂いが漂ってきた。調理場には一人の男ともう一人女がいた。

「拳西拳西、お腹すいたご飯まだ〜」

女の名前は久南白、黄緑色の髪をし、頭に飾りをつけオレンジと白の混ざった服を着ている。

「だあー、うるせえぞ白。今作ってるだろうが見て分かんねえのか。」男の名前は六車拳西、白い髪をし上は黒のタンクトップ下は茶色っぽいジーンパンを履いていて、手にはオレンジのグローブを着けている。

「だいたい飯が出来てもあいつらが起きてこなかったら食べねえだろうが。」拳西の言葉を聞いた白はその場に転がり子供の様に駄々をこねはじめた。

「やだやだ、白はお腹すいたの。お腹すいたー」

白の言葉を聞いた拳西は溜息をつくど、

「だったらお前があいつら起こしてこい。そうしたら飯が食えるぞ」

といった。

それを聞いた白は目を輝かせ

「拳西さっすが。じゃあ起こしてくるからご飯作っついてよね」

「わかったからサッサと行ってこい！」白は立ち上がると駆け足で調理場をでていった。

「拳西お前も毎度毎度苦勞してるな。」

冬獅郎がそう言つと拳西は振り返り

「もうなれた。白とは長いこと一緒にいるからな。まあ、お前らともだがな」

彼は溜息をつき苦笑しながらいった。

「たしかにそうだな。お前らとは100年以上も前からいるからな」 対する冬獅郎も苦笑しながら言った。

「さて、そろそろ白に起こされてあいつらも起きてくるだろ。悪いが冬獅郎、飯運ぶの手伝ってくれないか」

拳西は皿にのせられた料理を指さしながら言った。

「わかった。手伝つてやるよ」

「だつたらテーブルに運んどいてくれ。俺はもう少ししたら行く。」

冬獅郎はそれを聞くと皿を持って皆が揃っているだろつりビンググに向かった。

冬獅郎がリビンググにつくと、白の他に二人の女と五人の男がいた。

「冬ちゃん冬ちゃん、拳西は？」

白が頭の上に疑問符を浮かべて聞いてきた。

「拳西ならもう少ししたら来るつていつてたぞ」

冬獅郎は白にそうかえした。すると金髪の髪におかっぱの男が話し掛けてきた。

「拳西がかいな、なんや用事でもあるんかいな」

この男は平子真子という名前である。

「何言つてんねんハゲ真子が拳西だつて用事ぐらいあるやるが、そんなこともわからんなんてやつぱりハゲやなハゲ真子」 そう言つたのは中に白いTシャツを着ていて上下に赤いジャージ左胸の所に猿の文字がある服を着ている女だった。「うっさいなあひよ里、ハゲやないとなど言つたらわかるんじゃボケ」

女の方の名前は猿柿ひよ里。真子とは昔から言い合いばかりしている。

「おいおい、それくらいにしとけよ。飯が冷めちまうぞ。」

そういったのはサングラスを掛け水色のジャージに身をつつみ、星のような髪型をしている男だった。

「ラブの言う通りだよ真子、ひよ里、せつかく拳西が作ってくれた料理なんだからね」

そう言ったのは、長い金髪に指揮者が着そうな黒い服を着ている男だった。

「たしかにローズの言う通りだな」

ソファに座っていた黒髪で金の瞳をしている男がいった。

「黒乃もいつてんだいい加減やめとけ」 そうラブが言うと真子とひよ里はやつと言い合いをやめた。

まず水色のジャージを着ている男の名は愛川羅武。皆からはラブと呼ばれている。次に長い金髪の男の名は鳳橋楼十郎、皆からは愛称でローズと呼ばれている。

最後に黒髪に金の瞳の男の名前は神川黒乃という。

「結局、拳西は何してるんや。冬獅郎は聞いてないんか」

そう冬獅郎に聞いたのは、セーラー服を着ている女だった。

「多分まだ何か作ってんじゃねえのか」

と冬獅郎は答えた。このセーラー服を着ている女は矢胴丸リサと言う名前である。「ほら皆さん椅子に座って拳西さんを待ちましょう。」

最後の一人である緑色の服を着ていて、帽子を被っている男がそう言った。「ハッチ皆の前に置くの手伝ってくれないか？」

冬獅郎がそう言った。

「わかりました。手伝いましょう。」

この男の名前は有昭田鉢玄、皆からはローズと同じく愛称のハッチと呼ばれている。冬獅郎とハッチが皿を置き終えると扉の向こうから足音が聴こえてきた。

「何だおまえらまだ食ってなかったのか」 拳西が右手におぼんをのせてやって来た。

「拳西を待つてたんだよ」白お腹すいたお腹すいた」  
白がまた駄々をこねそうな感じだったので黒乃が両手をあわせ  
「それじゃあ食うとするか。いただきます」  
というと、皆一斉に「「「「「「「「「「いただきます」「」「」  
「「「「「「「「「「といた。」

「拳西、結局用事つてなんやつたんや」  
真子が拳西に遅れた理由を聞いていた。

「ん、ああ昼のデザート作つてたんだよ」  
「デザートつて何作つたんだよ」

真子の質問に答えた拳西にラブが質問していた。

「ゼリーだな。今回はなかなか上手く作れたぜ」

「拳西のデザートは上手いからな、あたしもひよ里も皆楽しみや  
な」

リサが拳西にそう言葉を返していた。「おいもうこんな時間じ  
やねえか。俺は学校があるからな先に失礼するぞ」

といい、冬獅郎は部屋からでていった。

「学校なんて面倒くさくないんかいな」

「確かに高校だっけか、勉強なんて面倒くせえのにな」

「冬獅郎は真面目だからねえ。」

「冬ちゃんは頑張りやさんでもあるしね」

「冬獅郎はあたしらの中で一番頭がええしな」

「たしかにそのハゲ真子とは違って頭ええのはたしかやねん」

「ひよ里、何さりげなく俺を馬鹿にしとんじゃボケ」

「真子もひよ里もとりあえず落ち着け」

「黒乃さんの言う通りですよ真子さんひよ里さん」

「お前ら食い終わった食器は水に浸けとけよ、汚れが落ちにくく  
なるからな」

皆がそれぞれ話しをしていた。その時扉が開き空座第一高等学校  
の制服に身を着た冬獅郎が姿を現した。

「それじゃあ俺は行くからなお前ら自分のやることはきちんとや

つとけよ」

「はい。いつてらっしゃいます。冬獅郎さん」

冬獅郎の言葉に返したのは、ハツチだった。その言葉を聞いた冬獅郎は入って来た時と同じ様に部屋からでていった。

冬獅郎がでていったあとの部屋では

「やっぱり学校なんてよく行くよな冬獅郎を尊敬するぜ」

「」「」「同感」「」「と真子、リサ、白、ひよ里はラブの言った

ことに同意した。

同意しなかった四人は顔を互いに見合わせて苦笑いしていた。

これが、仮面の軍勢ヴァイサードの朝の出来事である。

## 一話（前書き）

キャラの口調がわからないので、話が変かも

## 二話

冬獅郎が学校に向かつて歩いてみると、後ろから声がきこえた。

「おい、冬獅郎一緒に行くぞ。」

振り返ってみると、髪の色はオレンジ瞳の色ブラウンの空座高校の制服を着た男がいた。

「黒崎か、別にいいが浅野や小島はどうしたんだ」この男の名前は黒崎一護。見た目は不良のようだが、見た目とは違い中身は優しい男である。

「水色が啓吾がまだ寝てるとか言ってたからな先に行ってくれて言われたんだよ」一護と冬獅郎は揃って溜息をついた。

「休み明けなのはわかってるが何故浅野は学習しないんだ」

「それに付き合っている水色がよくキレねえよな。たまに敬語で呼ばれて他人みたいなことって、啓吾が泣いてる時があるが」溜息をする気力もなくなったのか無言で二人は歩き続けた。

高校に着き冬獅郎と一護は同じクラスなので、互いに自分の席に座り荷物を置くと、立ち上がり喋りだした。「啓吾と水色はやっぱまだ来てないみたいだな。」

「茶渡もまだ来てないみたいだしな」と、二人が話していると女の声が聴こえ二人を呼んでいるようだった。

「おい、黒崎くん日番谷くん。久しぶりー」声が聞こえてきた方をみると、そこには胡桃色のロングヘアに六つの花卉の形をしたヘアピンをつけている女がいた。

「井上か、久しぶりっていつでも休み明けだからほんの二、三日だろうが。」

彼女の名前は井上織姫といい、冬獅郎、一護とは高校からの付き合いである。

「あはは、それもそうだよねえ、失敗しちゃったかな私。」

織姫は恥ずかしかったのか頭の後ろに手を持っていき、自分の髪を触っていた。

「井上、たつきはどうしたんだ、いつも一緒に居るだろ」一護が織姫に聞くと織姫の代わりに冬獅郎が答えた。

「何を言っただ黒崎、有沢はいつもの様に朝練だろ」冬獅郎が一護に言った。

「そういえばそうだな。たつきが井上の側離れることがあるのは部活の朝練か、用事があるときくらいだろうしな、それに……」一護が言葉を切りまわりを見渡していると、冬獅郎が

「有沢いわく万年発情猫の本匠がいるからな、井上に何をするかわかんねえしな」

冬獅郎が言った言葉に一護が溜息をついた。

「黒崎くん日番谷くんも千鶴ちゃんのことそうというのは……」

織姫が千鶴のフォロー言っていると後ろから織姫の胸元目掛けて手が回されていた。

「んふふふ、織姫今私の事話してたでしょ」

いつのまにか織姫の後ろに女がいた。

彼女の名前は本匠千鶴、可愛い女の子が好きで今は織姫に引っ付いている、わかるようにそっち系である。

「出たか万年発情猫」

冬獅郎が小声で言ったのに千鶴には聞こえていたのか反応して、

「ちよつと日番谷、たつきみたいな言い方しないでよ。私は万年発情猫なんかじゃないわよ」

怒ったようにいうと、一護が

「じゃあ一体なんなんだよ」

一護が千鶴に向かっていうと

「私は万年発情してるんじゃないで、可愛い女の子が好きなのよ織姫みたいな女の子がね。」千鶴が何故か胸を張り誇らしげに答えた。一護と冬獅郎は面倒くさくなったのか、溜息をつく

だけだった。

「だから織姫ちよつとおとなしくしててね、たつきが来るまでに終わらせるからうへへっ。」

千鶴は手をワキワキ動かせ、涎を垂らしながら織姫のその豊満な胸に手を伸ばしていった。

すると後ろから鞆が千鶴の後頭部に跳んできて千鶴は避けることができず直撃し、前に倒れてしまった。

「はあっ、ギリギリ間に合った。一護、日番谷。千鶴、織姫に何もしてないよな」

鞆が跳んできた方を見ると、肩を上下動かし息を整えている女生徒がいた。彼女の名前は有沢たつき、ボーイッシュな感じで織姫とは無二の親友。一護とは幼なじみであり、空手の達人である。

「ああ、ギリギリ間に合ったみたいだぞ有沢。もう少し遅かったらやばかったな。」

冬獅郎がたつきにそういうと、隣で一護が首を縦に振って頷いていた。

「ほんとにギリギリセーフみたいだったのか、危なかった。」

たつきはホツとしたようだった。

「にしても、本匠にも困ったもんだな」

全くだとも言いたいかの様に織姫除いた三人が深く溜息をついた。

「ん、一護。まだ浅野と小島は来てないの、あたしはてつきりあんだ達と一緒にいると思ってたんだけど。それも茶渡もまだきてないみたいだし」

たつきは一護と冬獅郎の近くにいつものメンバーがいないことに首を傾げた。

「啓吾は水色が寝坊って言ってたからな、時間ギリギリにくるだろ。チャドはもうすぐくるんじゃないか」

その時、教室の扉が開き体格のいい大きな男子生徒が入ってきた。

「ム、一護、冬獅郎遅れてすまない。」

男の名は茶渡泰虎。メキシコ人のハーフで、一護達数人からは愛称のチャドと呼ばれている。

「チャド遅かったじゃねえか何してたんだ」

一護がチャドに聞くと、

「ム、学校にくる途中に車にぶつかってな」「車にぶつかる？」「」

チャドの言ったことに三人は驚いて声を張り上げた。

「それで車に乗っていた人が重傷だったから、背負って病院に運んでいた。」

すぐに冷静になった冬獅郎はチャドの様子に気になり聞いてみた。

「それで、茶渡お前は怪我してないのか。病院に行ったのだから一応検査はしたんだろう」

ようやく一護とたつきも我に返ったのか、チャドに怪我の様子を聞いた。

「そうだぜチャド車と衝突って大丈夫なのかよ」

「骨折したところとかないわけ」

「ム、問題ない。軽い打撲だと医者に言われた。ものすごく驚いていたが。」

チャドが、一護とたつきにいうと二人は安心したかのように息を吐いた。

「茶渡くんやっぱり身体丈夫だね」

織姫がチャドの丈夫さに感嘆の声をあげた。その言葉を聞いた冬獅郎が、

「確かに茶渡は、丈夫だな。普通車に衝突したら打撲ですまないぞ。」

冬獅郎が呆れたように溜息をつくと一護とたつきも同意するかのように首を縦に振った。

「一護、井上、冬獅郎、有沢。まだ啓吾と水色は来てないのか。」

チャドが四人に聞くと、何かを思い出したかのような動作を見せた。

「そういえば小島くんと浅野くんまだ来てないよね。」

「もうそろそろ来ないとHR始まつちまうよ」

「はあ、いくら寝坊でも限度があるだろ」

「確かに啓吾もいい加減にしねえとまた、水色に他人扱いされるぞ」

「ム、休み明けそうそう遅刻はまずい」

後一分でチャイムが鳴り響くというときに廊下を全力で走っている音が聞こえてきた。

「水色ー、休み明けそうそう遅刻はまずいよなー」

「そうですね浅野さん、確かにあなたはまずいかもかもしれませんね。ということで浅野さんあなたは遅刻してください。」

扉が開けられると同時に一人の男子生徒が入ってきた。その足元にはもう一人が倒れていて服がボロボロになっていた。

「一護、冬獅郎、チャド、井上さん、有沢さん。ギリギリセーフだよな。」

入ってきた男子生徒の名は小島水色、別名年上キラである。そこで憐れにも倒れているのは、浅野啓吾。一護、冬獅郎達の友達だが、さっきのように扱いは酷かったりする。

「ああ、ギリギリセーフだ小島。そのバカは置いてな。」

冬獅郎が言ったと同時にHRのチャイムが鳴り響き担任の女性先生が入って来た。

「黒崎ー、その扉の前で倒れてやつはどうしたんだ。ついでにそこも」

担任の先生こと、越智美諭。基本放任主義の先生でいい人である。

「先生ーそこにいるバカは廊下を走りこけて気絶しました。千鶴の方はいつも通りで織姫に卑猥なことしようとしてたので、あたしが黙らせました。」

一護の代わりにたつきが越智先生に質問の答えを返した。

「そうか、なら問題ないな。それじゃあHR始めるから皆席に座れー。その二人は無視してもいいからなー」

憐れな啓吾と千鶴を置き去りにしてHRが始まるのだった。

### 三話

時が経ち学校が終わり生徒達はそれぞれ動きだし教室から出ていった。

「冬獅郎帰ろうぜ。」

一護が冬獅郎に向かっていうと本人は鞆を持って立ち上がり一護の隣に移動した。

「ああ、わかった。小島と浅野、それに茶渡はどうしたんだ、いつも一緒に帰ってるだろ」

冬獅郎が一護に聞くと一護は

「啓吾と水色は一緒に商店街行くらしいぜ、啓吾が買いたい物があるらしいからな、チャドは朝、事故った人の所に行くんだとよ」

「そうか、ならちよつとコンビニ寄って行かねえか弁当を買いに行かねえとな晩飯がねえ」

冬獅郎が一護に聞くと一護は頷き

「良いぜ、それじゃあコンビニ行くぞ」

冬獅郎と一護はコンビニ向かって歩きだした。

コンビニで弁当を買い終えると二人は家に帰るため道を歩いていく。

「そっぴや冬獅郎弁当何でそんな買ってんだよ。普通、まとめてそんなに買うか？」

一護は冬獅郎が買った弁当を見て疑問に思ったことを言った。

「俺以外にも9人いるからな買って帰らねえと飯がねえからな、たまに家で作るがな」

冬獅郎が一護の問い掛けにそう返すと一護は

「そうか、冬獅郎の家ってそんなに大家族なのかよ。そっぴえば冬獅郎の家行ったことねえから分かんねえわ」

「確かにそうだな俺も誰かを家に呼んだことなんかねえからな、大抵が遊ぶ時浅野の家だったり外だったりするしな。」

それに」

冬獅郎は一瞬言葉に詰まり一護に言った

「俺の家にいるやつら個性があつてな、まともなのが俺も含めて4、5人しかいないという半分位は正直疲れる」

冬獅郎は心底疲れたように溜息をついた。それを見た一護が

「お前も苦労してんだな」

冬獅郎に労いの言葉を言った。

「黒崎、お前も苦労してんだろ。お前の親父関係で」

「ああ、まあな。お互い疲れるようなことをするやつが家族になると面倒だよな」

冬獅郎と一護は家にいる者達を脳裏に浮かべ同時に溜息をついた。

「まあ、一心の奴は昔から面倒だったがな」

冬獅郎は一護に聞こえないように呟いた。「それで一護今日は

あの幽霊の子に会いに行くのか」

「ああ、まあな。」「そうか、わかったならさっさといくぞ」

冬獅郎と一護は幽霊の子がいる所に向かって歩きだした。

### 三話（後書き）

次回から 原作突入します  
だきます 原作を買ったら四話は投稿させていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0945v/>

---

仮面の軍勢の氷龍使い

2011年10月9日11時56分発行